

《響き》と《ひねり》の言葉

—新カント学派と現代価値論との対話—

岡山商科大学：九鬼一人

一段目の情動？・「ドクサ・思いなし」としての情動

情動は対象の性質を表象している、と言われることがある。情動は身体的反応とその感受を含む、という古典的な図式を基本として、対象について価値的性質の知覚を説くわけである。それでは、情動と身体的反応との間の相関関係が根底をなす。——筆者としても、感情プログラムに類する情動にかぎり、この基本的図式を了とする。しかし、ここから論を起こすかたちで、〔狭義の〕価値判断の必要条件を身体的反応に求めるなら、情動の知覚と価値判断との区別を無みしかねないことになる。以下では、情動の非認知説（情動の非概念性・身体性）を批判しつつ、新カント学派的な認知モデルの価値判断説（注1）を前面に押しだしたい。その作業をつうじ、概念的・非身体的な高次認知的情動を足掛かりにして、〈一般性・体系性をもった価値判断〉のアイデアを構想したい。

ここでの高次認知的情動とは、洗練された（計画的・長期的行為に導く）認知能力を必要とする、罪悪感・羨望・嫉妬等である（Griffiths, P.E., 1997, p.100.）。そうした高次認知的情動は、身体的反応のレベルで説明しつくされるのだろうか。高次認知的情動に接続するものとして〈一般性・体系性をもった判断、すなわち価値判断〉を考えねばならぬ（価値判断と身体的感受のちがいについては信原幸弘, 2017, 第三章 2.を見よ）。そしてそれら情動を引き継ぐ価値判断として、《響き》と《ひねり》という二類型を呈示したい。

ところで情動の認知説に反対して、信原幸弘は以下のように情動の身体的感情説を説く。

「私たちは歯を剥き出しにしたイヌに恐怖を覚えつつも、そのイヌが檻のなかに入っているのだから、本当は怖くない（=危険でない）と判断することがある。つまり、イヌに恐怖を抱きつつも、イヌを怖くないと判断するのである。イヌへの恐怖が、イヌは怖いという判断なら、ここでは矛盾した判断が生じていることになる。すなわち、イヌを怖いと判断しつつ、同時に怖くないと判断していることになる。しかし、こんな明々白々の矛盾が生じているとは考えがたい。いくらなんでも私たちはそこまで愚かではない。そうだとすれば、イヌへの恐怖はやはり判断ではなく、感じであろう。イヌに恐怖を抱くとき、私たちはイヌをまさに怖いと感じているのである」（信原幸弘, 2017, 8頁.）。

信原の例で、イヌへの恐怖を感じているとして、それを一応 *feeling* として捌くなら、「怖くない」という契機を認めうる。この「怖くない」が、恐怖という *feeling* の否定であるなら、「怖くない」は、恐怖と同時に感受されることになり、一見したところ矛盾に陥る。ここで対象 k が「怖くない」 $a(k)$ （記述を $a(k)$ とする）という性質をもつとする。上の矛盾を避ける方法ためには、後に矯められる可能性を読み込みながら (i が $a(k)$ を帰属させるとき)、

それ $a(k)$ を i が信ずる、つまり「ドクサ・思いなし」 $Bi(a(k))$ と見なすべきである（注 2）。

情動がそのように〈認知的信念〉であるなら、身体性を棚上げにできるようにも見える。とはいえ情動にしても、感受と「密接に」連動している特定の身体的反応を想定するように促されまいか。例えばイヌに噛まれたくない、と恐怖を覚えるとき、身体が震えるとともに冷や汗を伴う。それと、例えば所属学校の運動競技での「応援」において興奮する身体的反応とは、ちがっているようにも思える。異なる情動には異なる身体的反応が対応している、というわけである。信原の言葉で言えば、「身体的反応はそれぞれに対応する価値的性質を表わしていると言えるのではないだろうか」となる（信原幸弘, 2017, 10-12 頁。Prinz, J., 2004, pp. 69-72.）。

高次認知的情動それぞれに特有の身体的反応が生じうるか、と問うてみよう。このことに関連して、身体性の評価は、認知的構成要素により精緻化されはしない、という説がある。認知的状況が「再較正」(recalibration) によって決めるのは、たかだか情動の種類にすぎない、というわけである（注 3）。較正とは、或る「探知器」に反応する情動について、「或る探知器で測ったら A だったのに別な探知器では B になる」という外見上の不一致を避けるよう、共通の基盤を探し、それぞれの探知器の追跡を把握することである。例えばネズミは過去の状況によって、餌を得るよう因果的に条件づけられているが、そのために餌の場所まで泳ぐというようには、条件づけられていないとする。後者の認知的条件下では、例えば餌を得ようとする情動が、「泳ぎ」を促すものとして修正をこうむる。こうして因果的に獲得された本来の身体性の情動からの逸脱も、さらなる再較正によって説明される。例えば通常の身体性の「怒り」は、或る種の認知的判断の状況下では、「不貞」に関する判断への反応として生じた「嫉妬」となる。このように別の認知的状態のもとでは、別の情動を構成する。もとより個々の高次認知的情動に対応する「原」情動は共通なのだから、身体的反応はもとの情動から派生したものかもしれない。とはいうものの認知的状態による決定は、再較正を積み重ねて、身体性の評価が帰属する情動の種類にまで及ぶ。そうだとすれば、「ドクサ・思いなし」たる高次認知的情動は、認知をとおして、おのおの特色をもつことになろう。それは、過去の経験に拘束されない、新奇性に感応した選好に応接する、というわけである（再較正は新奇性にひらかれた非帰結主義的選好を正当化する。ドレツキ, F., 2005, 第六章 2.）。

あらかじめ見とおしを言えば、「ドクサ・思いなし」に対するメタ的な反省が、それとは区別される命題内容をかたちづくり、概念的・非身体的な合理性（これが新カント学派的な価値論とも関係することは後述）にも呼応する「価値判断」の体系を形成してゆく。

二段目の価値判断《響き》

事実から価値を導けない、と言われることがある。価値的性質は事實的性質に還元されない。どんな論理的操作を加えても、認知的にすぎない事實的性質から、情動的指令を含む価値的性質を導くことはできない。そもそも対象のあり方を判断するには、対象から刺激を受ける必要があるが、その評価にかかわる価値的なあり方の場合、それを感受する

のは情動をとおしてのみ可能であろうからである（信原幸弘,2017,49 頁）。——そこで認知的契機を情動に盛り込んでこそ、価値判断が成立するという、新カント学派的な下絵を描いておく。

新カント学派的な存在と価値との二元論は、情動に基礎を置く二元論に与するとはいえ、やや事情は込み入っている。けだし事実判断（判断の一次的なレベルの表象結合強調）と狭義の実践的評価（判断の二次的なレベルの態度決定強調）とのちがい、さらにはかけがえのない個体の価値付帯性（判断内容としての価値関係性）（注 4）と法則論的事物的性（判断内容としての価値無関係性）とのちがいをもうけているものの、事実判断や事物的性は理論的価値の認知（一次的な判断レベルの表象結合+二次的な判断レベルの態度決定）（注 5）をまっぴらしてはじめて成立する。とくにリッカートの歴史哲学的論考では、論理的価値関係性の議論と価値的評価の議論が「主意主義的に」接合されていると断言している（注 6）。新カント学派の場合、事実判断は価値判断を前提しているため、判断内容としての物的性質（内容としての価値無関係性）と、判断形式としての表象準拠性（一次的な判断レベルの表象結合）とを区別しよう。前者は、物的性質と価値的性質の対の片方にあたるものであり、かけがえのない価値（後述する稀少性）は物的性質から導きだせぬ、という定式化を得ることができる。後者は、表象結合と態度決定との対の、片方にあたるものであり、結合するかたちにおいては、理論的価値の認知、分離するかたちにおいては、実践的評価の決定という両極に傾く。したがって二重判断の結合を強調すれば、新カント学派は認知説に接近し、二重判断の分離を強調すれば、それは感情説に接近する。—— 一般に情動の認知説といった場合、価値的性質（対象の価値付帯性）の認知にかかわり、それは理論的に措定される場合を念頭に置くから、——（現代的な）価値判断の認知説は、価値的性質（判断内容）の理論的認知（判断形式）という新カント学派の立場と整合的に理解される。すなわち情動の感情機能（感情説）に対する認知機能の重視である。それを新カント学派的に翻訳すれば、「ドクサ・思いなし」は、言わば表象結合態となり、それに対するメタ的な反省によって、妥当する命題内容を構成してゆく。

情動の身体説が動的な側面を強調するのに対し、以下では価値判断の認知的側面（二重判断の結合）に注目してゆきたい。とくに価値判断の認知的要素（注 7）を見てとるヌスバウムを借りれば（Nussbaum,M.,2018,p.87）、たしかに「痛みや激情の迅速な〔心の〕動きや感情がある」。されば「私たちは判断が情動の構成的要素である、そして構成的要素として他の要素の十分な原因でもあるとさえ認めてよい」ようにも見える。だが理性は「ここで、〔心の〕動きとなり、抱懐し、拒絶するのである。それは迅速にせよゆっくりにせよ、また確然としてにせよ、躊躇いがちであるにせよ、〔心の〕動きとなる」。この見地に立てば、遠くは愛情に因由する身体的反応は、悲しみの必要条件とはかぎらない。例えば「自己演技的悲しみ」のように、身体的反応は悲しみに類似していても、「ふり」（悲しみの感じは伴っていても）の場合があり、真の愛情から派生する類の「本当の悲しみ」とは異なるのである。「自己演技的悲しみ」の例で、失意は見かけにすぎず、それを受け入れぬとこ

ろから、「実は愛しておらず、悲しくないと思わず」という命題的態度が生じるのである。

ここで一段目の情動に、さらに整合性と選好が付加されて、《響き》の言葉〔以下、言葉を略す〕という価値判断になる、としてみたらどうだろうか。この《響き》Klingen という文学的表現を、価値判断の或るものに使うのは、体験の「衝撃」、価値が反《響》して増幅することを照射したいからである。そうしたことは、親近的なもの・新奇なものに出会うとき起こる。――すなわち、情動に依拠する選好に関する親近性原理・新奇性原理は、価値の高低の純拠点となる《響き》の価値判断と接続できる。例えば Park, et.al.,2010 では顔画像で親近性選好、風景画像で新奇性選好、幾何学的図形で偏りなしという結果が知られている（注8）。下條信輔によれば、そうした選好は、親近性と新奇性に大きく左右されるという。引用をもって語らしめる(下條信輔,2008,89-90 頁)。

「さて、音楽のような聴覚刺激の場合、赤ちゃんの視覚やクロスモダル(感覚間)の場合、おとなの視覚の場合と、いろいろ見てきました。共通しているのは、古い覚えのある刺激の方が魅力的になるという主張(親近性原理と呼びましょう)と、新しい刺激の方が魅力的という主張(新奇性原理)とが、両方あるということです。言うまでもなくこの両者は論理的な意味ではもろに対立しているのに、です」。

この選好から価値判断への移行は、親近性と新奇性に対応する。鈴木興太郎の厚生経済学に範をとり、新カント学派的な合理性（目的合理性／価値合理性の変形）を押しだして、価値の高低、もしくは期待効用に注目しよう。ちなみに価値感情がかかわる「趣味判断」を、幸福的（経済的）な選好に連続するものと見なせるかもしれない（リッカートの完結的部分の価値）。柏端達也,2017,193 頁では、価値の一般的形式として、ルイス流の価値の傾向説がとられたが、「最善の」価値という概念に典型的な、価値間に成り立つ推移性を、柏端の非関係的価値の図式と代わるかたちで説かなくてはなるまい。

価値の高低を論ずるためには「修正された拡張された選択肢」を導入しなくてはならない(記述を視野に入れているので、厚生経済学の定式化と異なる)。相互に排他的で、結合すれば網羅的な帰結〔となる対象〕 α に対して、その全体集合を X ($X \ni \alpha, \beta, \gamma, \dots, n(X)$ を X の要素の数とすると、 $3 \leq n(X) < \infty$)、 X の非空な有限部分集合全体の集合族を K とする。 K の要素は A, B, C, \dots によって表わされて、それぞれ機会集合と呼ばれる。 A, B, C, \dots には記述 $f(\alpha)$ ($\alpha \in A$)、 $g(\beta)$ ($\beta \in B$)、 $h(\gamma)$ ($\gamma \in C$)、 \dots が対応しているものとする、ここで「拡張された選択肢」(鈴木興太郎,2009,310-311 頁)を修正して、 $\alpha \in A$ で $(f(\alpha), A)$ (修正された拡張された選択肢)を「 A から $f(\alpha)$ を選ぶ」と理解すると、期待効用にもつぱら注目した選好、「 i は $(f(\alpha), A)$ を $(g(\beta), B)$ より選好する」がえられる ($(f(\alpha), A) Ri(g(\beta), B)$)。

これらの道具立てで、親近的な要素に左右される人は、 $f(\alpha), g(\alpha)$ で記述される同じ対象 α を実現したいとき、 $(f(\alpha), A)$ ($\alpha \in A$) と $(g(\alpha), B)$ ($\alpha \in B$) のどちらを選ぶだろうか。親近性を原則として保持するなら、価値体系に準拠して、 A, B という機会集合を無差別に扱うだろう。これはつまり、 A, B という機会集合の選好間に、差異が生じないという帰結主義的な見方である（修正された極端な帰結主義者、鈴木興太郎,2009,313 頁。定義 4.1 を参考にした）。例えば確実にカレーを食べられると認知しており、いつもの選好に忠実であるなら、 A 店・ B

店の選好のちがいは見いだせず、いずれでもカレーを食べることになる。「修正された拡張された選択肢」どうし、 $(f(\alpha), A)$ と $(g(\alpha), B)$ とでは、 $n(A) > n(B)$ ならば、機会集合の豊富な前者の方が α の実現する確率が低いから、「帰結主義者」はそのような機会集合 A の「修正された拡張された選択肢」 $(f(\alpha), A)$ を選好しない。例えば、おのおの同じ分の当たりくじが入っている二つの袋があるなら、「帰結主義者」は全体のくじの少ない袋から選ぶとするだろう。帰結〔となる対象〕が同じだから A, B のいずれから選ぶにせよ効用は同一。 A を選んだうえ $\alpha \in A$ を選ぶ確率 $P(\alpha \& A) = P(\alpha|A) * P(A)$ は、 $n(A)$ が大きいほど、つまり $P(\alpha|A)$ が小さいほど小さくなる。したがって「帰結主義者」ならば、「 B から α を選ぶ」 $(g(\alpha), B)$ だろう。

これとはちがったタイプの選好をする人はいないだろうか。 A を選んだうえ $\alpha \in A$ を選ぶ確率 $P(\alpha \& A) = P(\alpha|A) * P(A)$ は、 $n(A)$ が大きいほど小さいにもかかわらず、 $U_{\alpha \& A}$ が大きくなること余りあれば、期待効用 $E_{\alpha \& A} = P(\alpha \& A) * U_{\alpha \& A}$ は大きくなり、多選択肢選好に傾くのではなかろうか。そこからの類推で、 A を選んだうえ $f(\alpha)$ を選ぶ確率 $P(\alpha \& A) = P(\alpha|A) * P(A)$ は、—— $n(A)$ が大きいほど——小さいにもかかわらず、 $U_{\alpha \& A}$ が大きくなること余りあれば、期待効用 $E_{\alpha \& A} = P(\alpha \& A) * U_{\alpha \& A}$ は大きくなる(かけがえのない価値)。多選択肢選好に傾く彼女／彼は——親近性ではなく、むしろ新奇性を意思決定のメルクマールとする行為者である。——いま、食事をとろうとしている。二つの料理店があつて、なにがメニューに載っているか知らないけれども、 A 店メニューの方が B 店のメニューより多いこと $n(A) > n(B)$ を認知している。そのとき彼女／彼は「修正された拡張された選択肢」 $(f(\alpha), A)$ ($\alpha \in A$)を $(g(\beta), B)$ ($\beta \in B$)より厳密に選好するのである(修正された極端な非帰結主義者, 鈴村興太郎, 2009, 319頁。定義5.2を参考にした)。

機会集合とは選択にさいしての、可能な選択肢である。「帰結主義者」と「非帰結主義者」は、同じ $f(\alpha)$ を現実に選好しているとしても、「帰結主義者」(目的合理主義者)は、貫世界的に同一の帰結〔となる対象〕を選好する。そして選択は、諸結果の価値や善し悪しによって決まってくる。従来の価値体系が、親近性をもった選好を支持するように働いて、慣れ親しんだものへの価値判断を喚起する価値を増幅する。それに対して非帰結主義をとる場合は、背景にある機会集合の影響を受けて、選好の内容がちがってくる。「非帰結主義者」(価値合理主義者の或る者・注9)は背後に控える可能的状況が豊かなものを選好する。つまり目新しいものを選好するよう促されるのである。

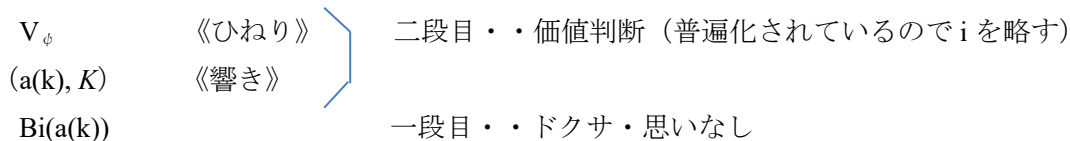
要するに帰結主義的であれ非帰結主義的であれ、どのみち選好に作用するのは、期待効用に関する状況の認知という概念的・非身体的な合理性の見地であるまいか。こうして、相対的に卓越したいいくつかの準拠点 $(a(k), K)$ ($k \in K$)を、記述の外延に即して獲得する。すなわち $\exists p \exists s(a(k), K) Ri(p(s), S)$ ($s \in S$)

となる相対的に選好される《響き》をえられる。以下では、これを簡略化して単に $(a(k), K)$ と記す。

二段目の価値判断《ひねり》

《響き》で、価値判断が完結するとはかぎらない。《響き》の言葉を引き継ぐかたちで、

価値判断が立てられ、より整合的・一般的な体系化がなされることがある。



そこで《響き》と並んで、《ひねり》=Drehung の言葉〔以下言葉を略す〕を想定し、 V_{Ψ} とする。 V_{Ψ} は $V_{\Psi}(a(k), b(l))$ 、つまり「 $(a(k), K)$ を $(b(l), L)$ より選好する」を記述の内包に即して普遍化した原則である。《ひねり》は〈意味的に〉選好される点で、《響き》と基本的にちがう（そのアイデアについて九鬼一人,2012）。こうした価値判断によって成立する体系は、いくつかの価値判断《響き》を準拠点として決めれば、価値の体系を紡ぎだせるだろう。こうして新カント学派が要請するような、価値の普遍性を獲得できるのである。

例えば、いくつかの《響き》、イヌは噛むから、相対的に危険だ $(a_1(k_1), K_1)$ 、転びやすい床は、相対的にあぶなっかしい $(a_2(k_2), K_2)$ 、.....を総合して、私たちは例えば、「身体的健康に配慮すべきである」 V_a という類の一般的な価値判断を形成する。ただしここでは単純な一般化と言うより、一種の「技巧」が加わる。すなわち、バンジージャンプは危険だけれど、相対的にスリルがある $(a_3(k_3), K_3)$ 、多量の飲酒は体を壊すかもしれないが、相対的に快楽を伴う $(a_4(k_4), K_4)$ 、といった $(a_1(k_1), K_1)$ 、 $(a_2(k_2), K_2)$ と一見、整合的でない《響き》がある場合、「自己の身体は大切にすべきであっても、自由主義の享受を適度に実現する可能性がある分には、身体を危害にさらしてもかまわない」 V_a という具合に、一見予想される「身体的健康に配慮すべきである」 V_a より、技巧を経た《ひねった》「解釈」を個々の価値判断間につけるのである。価値判断を体系化してゆく能力は、一般化／推論に加えて、解釈の能力であり、それらをつうじて価値判断《響き》を揚棄し、価値判断《ひねり》を作りあげる。そして「一見した」《響き》どうしの矛盾は、滑らかな解釈により解消されて、技巧的な価値判断へと統合されてゆくのである。もとより、「自己の身体は大切にすべきであっても、自由主義の享受を適度に実現する可能性がある分には、身体を危害にさらすことが許される」 V_a という「体系的な価値判断」の見地から、大幅に逸脱する分には、度を越した $(a_4(k_4), K_4)$ が貶価されよう。

ここでデイヴィドソンの「善意の原則」が導きとなろう(注10)。つまり解釈においては、私たちの信念と大体において（滑らかに）一致する解釈をもって $(a_1(k_1), K_1)$ 、 $(a_2(k_2), K_2)$を「架橋」するのである。つまり《ひねり》の段階では、記述の内包が効いてくるので、価値体系の形成のさいには、概念的・非身体的な解釈的要素が浸透している。ソロモンを借りれば、「情動とは反応と言うより解釈である」(Solomon, R.C.,1993,p.188.)。

かりに《ひねり》の文法が、かくのごときものであるなら、それは《響き》相互の関係を問い、その間に普遍性（必然性）を打ちたてようとするであろう。つまりいくつかの《響き》を滑らかに解釈する（普遍化する）言葉として振る舞う（=Verhalten 注11）。例えば脳死についてこのことを見てみよう。主体 S_1 は母の脳死を悲しいことだと思っている。例えば臓器移植賛成者である彼は、「生きようとしていない生物個体は悲しみをかけることに、相対的に値しない」という価値判断をもつかもしいない。主体 S_2 は

母の脳死を悲しいことだと思っている。しかし臓器移植反対者である彼は、「見なしの死を前提にした移植には、相対的に不遜な感じがする」という価値判断をもつかもしいない。《ひねり》として「生きようとしている同朋は殺すべきではない」という価値判断が立てられる。ここでの議論から見やすいように、問題は脳死を「生きる可能性を絶たれた見捨てるべき生物個体」と見なすか、「移植のために不当に見なされた仮の死」と見なすか、という認知とかかわる価値判断が要諦をなす。このさい、ホーリスティック／「技巧的」に、《ひねって》解釈することで、優劣をつける可能性も生まれてくるだろう。

とくに注目したいのは〈新奇性に感応した価値の増幅〉である（リッカートのかけがえのなさを参照）。例えば泥の皿を食べることを見てみよう。 $(b_1(l_1), L_1)$ 「食べることなぞ突拍子もつかず、その逸脱は相対的に貶められる」という《響き》をもつかもしいない。 $(b_2(l_2), L_2)$ 「食することはほぼ脅迫に近いものとして、相対的に貶められる」という《響き》をもつかもしいない。ここで価値判断 $(b_2(l_2), L_2)$ ……の意味を基準にして、それとの相関関係において価値判断 $(b_1(l_1), L_1)$ の意味が再把握される（正確には $(b_3(l_3), L_3)$ に再記述される）。そのさい、「考えもつかないジョークを帯びたアートの価値を賦与すべきである」 V_b という $(b_1(l_1), L_1)$, $(b_2(l_2), L_2)$ ……を架橋する解釈のもとで、普通評価されない $(b_1(l_1), L_1)$ （つまり $(b_3(l_3), L_3)$ ）の価値が、物珍しいものとして評価される。《ひねり》による価値的な増幅が知覚と直接関係をもたないこと（非身体性）は、泥の皿を食べるというパフォーマンスが、「知覚的裏付けを必ずしも要しないコンセプチュアルアート」であることによって裏づけられる。

課題として残したいが、精神医療での認知療法は、価値判断をコントロールする。すなわち、固定的なスキーマに基づいて、誤解や思い込み、拡大解釈などさまざまな不快な気分が生じさせる歪んだ自動思考に対し、「言語化された思考」の歪みを修正することで症状が改善されるとされる心理療法である。だとすれば、これは価値判断の認知説を支持するのではあるまいか。

まとめ

価値的な反《響》が大きければ、《ひねり》がより顕著になることが考えられる。すなわち一方で《響き》が帰結主義的な親近性に準拠して、固定した価値体系に準拠しているほど、《ひねり》の「言葉」のなかでも、ありふれた《響き》が、——他方で、《響き》が非帰結主義的な新奇性に準拠して、価値体系からズレているほど、意外な《ひねり》によって逸脱例の新鮮さが、価値の増幅（escalation）をもたらすだろう。こうして、新カント学派的な合理性（帰結主義／非帰結主義）を包括した、普遍的な価値体系をつくりあげる。

注

(1) ヴィンデルバント、リッカートがお手本にした、ロツェの妥当価値概念によれば、「妥当という現実態は、しかしながらアイデア界固有で現実態のあり方なのであって、この〔ヘラクレイトス的な〕変転とは関係せず変わることがない」（Lotze, H., 1912（←1874）に出版, S.514.）。この妥当者はアイデア的な類概念と言うよりは、むしろ基本的に命題が考えられている（Rickert, H., 1921, S.121 は失当である）。「在るところの物を……現実的と名づける。生起する出来事も……現実的である。成立している関係は……現実的である。最後に妥当

する命題をわたしたちは、現実的に真であると名づける」(Lotze,H.,1912 (←1874) ,S.511.)。かくのごとく真理価値(認知)モデルの価値判断論になっている。

(2) 高次認知的情動は、身体的反応のみによって決まるわけではない。親の死に目に愛情を感じていない、疎遠さという情動を感じていたとして——世間体から悲しむそぶりをしていて、実際悲しんでいるように、涙も心拍数の変化も生じたとせよ。その場合、悲しみの感じ・振る舞いがともなうことがあろう。にもかかわらず、当人は疎遠さしか感じていないのだから、悲しむべき理由を見いだせない。それは「自己演技的悲しみ」と言うべきである。情動の認知的契機としては、「愛していない」のであって、その前に「自己演技的悲しみ」は阻却される。「悲しみの感じ」と「悲しくないという認定」とは同格でなく、身体的反応(涙や心拍数の変化)を考慮しても、「愛していないから悲しくない」という本当の情動は探知できないのであり、身体に依拠したモジュール性は、とくに悲しみに関して阻却される。[モジュール性への疑問点。飛行機恐怖症に安全性を教えると、恐怖を抱きつつも、自分の小心に自卑の情動を感じるよう、変わるかもしれない。]

(3) Dretske,F.,1986, p,22-24.「指示(assigned)機能により意味するもの、はたまた私たちが(意図、目的、信念によって)指示機能を具えたシステムでの関係のあり方を理解するには、以下のケースを考察せよ。1グラムの何分の一に較正された、僅少な対象の重さを決めるための使用が意図された、敏感なバネばかりがある」。それが1gを0.98gと測ったとしても、それは引力の差であり、標高の指標をレジスターしているのである。「私たちは、道具の指示機能を変えることがときとしてある。較正するさい、例えば普通の使用で測るのには用いないものを、測定するのに使われる」。認知的状況によって指示機能が変われば、測定された指示結果の意味も再較正され、変化しうるのである。ref.Prinz,J.,2004,p.99.

(4) Rickert,H., 1902,1版を右肩1添え字で、Rickert,H.,1913a,2版を右肩2添え字で引用頁を示す。「S.351¹/S.314² 私たちがさても問うのは、かけがえのなさが統一性の根拠をなしうるのはいかにしてか、のみであり、S.352¹ それには、不可一分割者 [= 個体] はつねに価値に関係づけられた個体であると答えられるにちがいない」。価値付帯的人格は、かけがえのない人格的統一をなしている。

(5) 『認識の対象』では、抽象的記述にとどまっているので、『自然科学的概念構成の限界』をひもとけば、前科学的個体に対して態度決定を及ぼして具体的な認識が成立すると、読み込むことができる(表象だけではなく、前科学的個体が前提する概念的要素が、認識にはそもそも必要になる)。九鬼一人,2017,5頁、「承認」については10-12頁。

(6) リッカートの場合、この点、今ひとつ不明確である。九鬼一人,1989,46-47頁。しかしながら価値関係の手続きの根底にある評価といえども、それが客観的/普遍妥当的なら妥当する命題に由来すると考えているのだろう。

(7) 情動とは、知覚・判断して継起する反応のたぐいではなく、評価的な判断とする点で、ソロモンはヌスバウムと同じである(Solomon,R.C.,1993,p.187-188.)。ヌスバウムの依拠するストア派の見解は、「情動が非-推論的動きであるとする見解」(Nussbaum,M.,2001,p.24.)

に反対する。ストア派では「情動は評価的判断の観点のみから定義される」(ibid.,p.33.)。これを受け継いで言うに、「思うに、私たちに残されているのは、少なくとも部分的な構成要素、すなわち認知的要素は情動がかくあることの部分であるというテーゼである」(ibid.,p.35.)。つまり評価的信念という〔認知的〕要素が情動の欠くべからざる要素である。ただしヌスバウムは、「評価的判断が正当化されているという判断=情動」とするので、むしろ本稿の言う価値判断の定義に近い。ここでは命題的態度説・多次元評価説・ラベルづけ説・解釈説・メタ認知説等、認知説のなかでも、一番最初の「命題的態度 $Bi(a(k))=情動$ 」図式を一応、採用するとしておく。

(8) 満田隆／阪口遼平 2015 では、魅力の高い顔で新奇性選好は生じないとされる。見知らぬ人に警戒感を抱くがゆえに、逆に親近性選好が生じると解釈している。

(9) 科研費基盤研究(C)2015～2017・課題番号 15K02024・価値合理性の復権—とくに新カント学派の規範概念を中心に・研究代表者 九鬼一人参照。

(10) 「われわれが母国語を習得する際に、大人の言うことを(大体において)正しいものとして受け入れる以外にないと同様、翻訳においても、相手の言うことが大体において(われわれから見て)正しいものと前提する以外にない。もちろん、翻訳の相手と翻訳者との間で、信念の完全な一致が得られるような翻訳が可能であるとは限らない。しかしどのよう^に信念が異なるのか具体的に問題にすることができるためにも、その前提となる背景として、大規模な一致が必要不可欠だ」(丹治信治,1990,231 頁)。一見非整合的な価値判断について一致するよう、《ひねり》は架橋する。

(11) この意義賦与作用を支持するリッカートの原典を参照せよ。彼は、「それ〔判断作用／意志作用／感情作用〕は**熟成**した判断にも付随しており、しかも肯定ではなにかを認容つまり承認し、否定ではなにかを棄却するという、**論理的 Sinn** としては本質的なもの、すなわち「実践的」態度("praktisches" Verhalten)をなす」と述べている。(GE1,S.57/GE2,S.106. 太字は二版のみ。Verhalten については Rickert,H.,1913b.参照。Vgl.「関与」は Rickert,H.,1905, S.83,ein wertendes Verhältnis にも遡れる) としている。

文献

Dretske,Fred,1986,“Misrepresentation“,in:Bogdan,R.,*Belief:Form,content and function*,Oxford:

Oxford University Press,pp.17-36.

ドレッスキ.F.著,水本正晴訳,2005,『行動を説明する : 因果の世界における理由』勁草書房。

Griffiths,Paul E.,1997,*What emotions really are*,Chicago:University of Chicago Press.

柏端達也,2017,『現代形而上学入門』勁草書房。

九鬼一人,1989,『新カント学派の価値哲学』弘文堂。

九鬼一人,2012,「目的合理主義者と非帰結主義者——version2 : 規範から記述へ」『岡山商大論叢』第 47 卷第 3 号,61-79 頁。

九鬼一人,2017,「リッカートの真理論」『岡山商大論叢』第 53 卷第 2 号,1-32 頁。

Lotze, Rudolph Hermann,1912(←1874),2Aufl., herausgegeben und eingeleitet von Georg Misch.

- Logik : drei Bucher vom Denken, vom Untersuchen und vom Erkennen* .(Philosophische Bibliothek ; Bd. 141 . System der Philosophie ; T. 1),Leipzig : F. Meiner.
- 満田 隆, *阪口 遼平,2015,「画像選好判断における親近性と新奇性の影響—魅力度と画像特性の関与」日本認知心理学会第 13 回大会 DOI https://doi.org/10.14875/cogpsy.2015.0_131.
- 信原幸弘,2017,『情動の哲学入門 価値・道徳・生きる意味』勁草書房。
- Nussbaum,Martha,2001,*Upheavals of thought; The intelligence of the emotions*, Cambridge,U.K.: Cambridge University Press.
- Nussbaum,Martha,2018(←2004),”Emotions as Judgements of Value and Importance”,in;ed.by Aaron Ben-Ze’ev and Angelika Krebs,*Philosophy of Emotion*,Vol.1,London and New York: Routledge,pp.77-92.
- Park J., Shimojo E., Shimojo S. (2010). Roles of familiarity and novelty in visual preference judgments are segregated across object categories. *Proc. Natl. Acad. Sci. U.S.A.* 107, 14552–14555.
- Prinz,Jesse J., 2004, *Gut reactions : a perceptual theory of emotion*,Oxford; Oxford University Press.
- Rickert,Heinrich,1892,*Der Gegenstand der Erkenntnis:ein Beitrag zum Problem der philosophischen Transcendenz*,Tübingen:J.C.B.Mohr. 略号→GE1
- Rickert,Heinrich,1902,*Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften*, Tübingen:J.C.B.Mohr.
- Rickert,Heinrich,1904,2.verb. und erweit. Aufl.,*Der Gegenstand der Erkenntnis:Einführung in die Transzendentalphilosophie*,Tübingen: J.C.B. Mohr.略号→GE2
- Rickert,Heinrich,1905,“Geschichtsphilosophie”,in;*Die Philosophie im Beginn des 20 Jahr -hunderts,Festschrift für Kuno Fischer*, Heidelberg:Carl Winter’s Universität-buch -handlung,Bd. II ,S.51-135.
- Rickert,Heinrich,1913a,2.neu bearb.Aufl.,*Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften*, Tübingen:J.C.B.Mohr.
- Rickert,Heinrich.,1913b,“Vom System der Werte”,in;*Logos*,IV,S.182-221.
- Rickert,Heinrich,1921,*System der Philosophie, Allgemeine Grundlegung der Philosophie*, Tübingen:J.C.B.Mohr.
- 下條信輔,2008,『サブプリミナル・インパクト : 情動と潜在認知の現代』筑摩書房。
- Solomon,R.C.,1993,*The Passions*,New York:Doubleday.
- 鈴木興太郎,2009,『厚生経済学の基礎——合理的選択と社会的評価』岩波書店。
- 丹治信治,1990,「翻訳と理解」『現代哲学の冒険⑤ 翻訳』岩波書店,209-259 頁。